

神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
145

【神秘学ポエジー～風遊戯 第290集】 photo ヴァージョン

photopos 3601-3625

《2024.7.18～2024.8.13》

神秘学遊戯団

昨日のことでさえ
そんな昔のことは忘れた
と笑っていえるほど
私は記憶でできている

じぶんに都合よく
思いこむことができるように
記憶を書き換えているとしても
私は記憶でできている

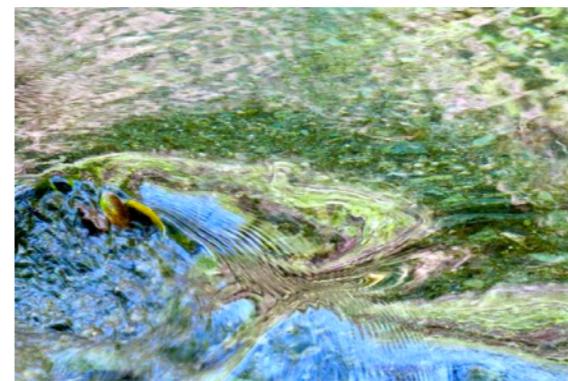
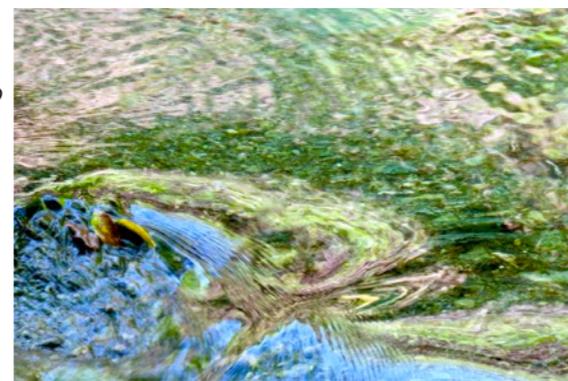
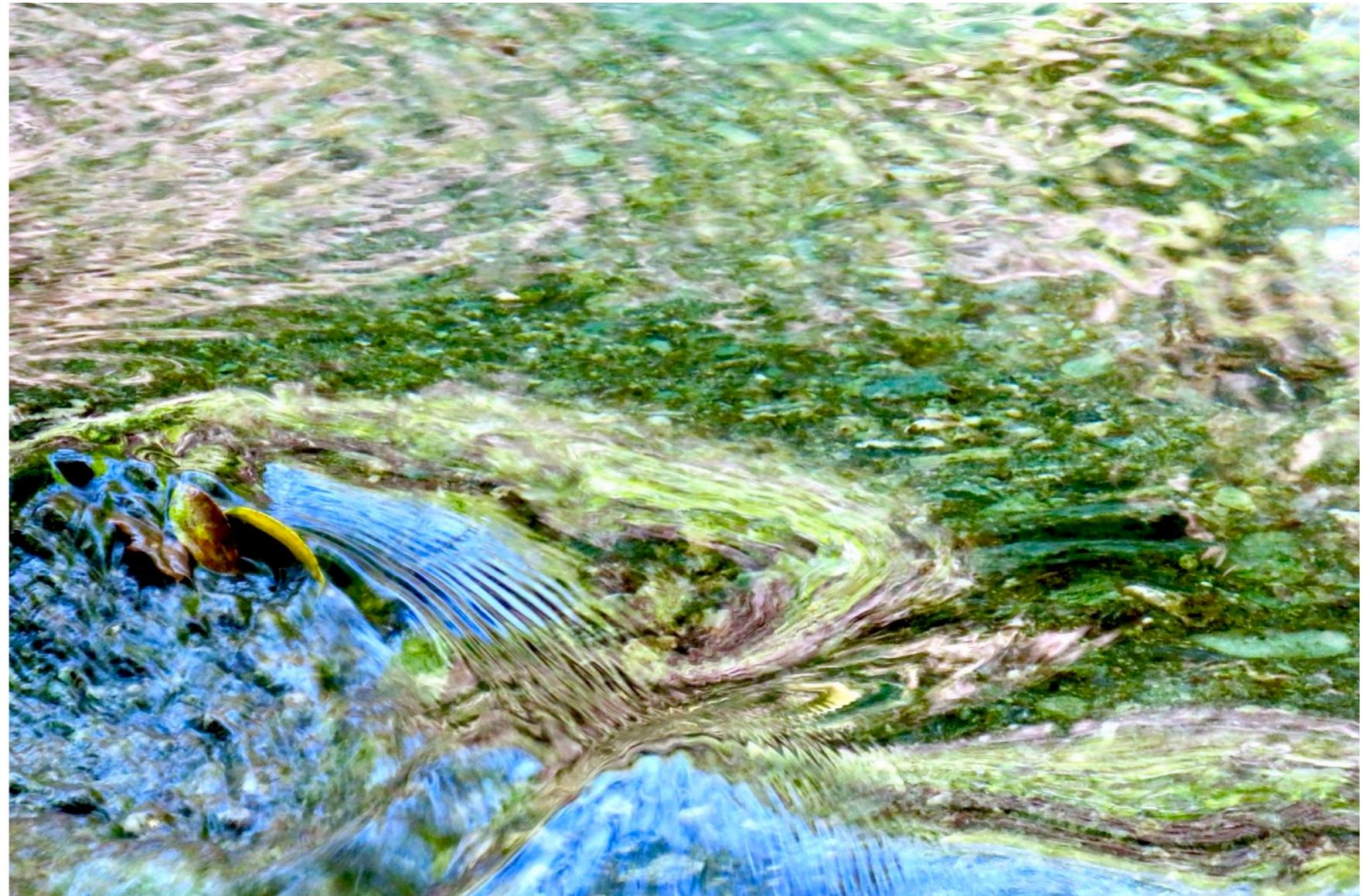
忘れてしまいたいことを
忘れることもできるように
記憶の魔法を使えるならば
私は記憶でできている

忘れてしまいたいのに
忘れることのできないように
記憶の無情のなかで
私は記憶でできている

いつのことなのか思いだせなくても
ここでこんなことがあったと
たしかに覚えているように
私は記憶でできている

じぶんのことでないことも
ひとの記憶をたどり
じぶんのもうひとつの経験にきるよう
に
私は記憶でできている

無私でなければ
決してできないことでも
そこにはたしかに私がいるように
私は記憶でできている



愛媛県久万高原町・古岩屋にて

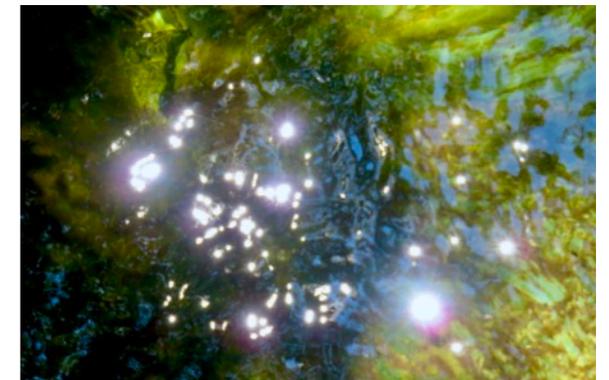
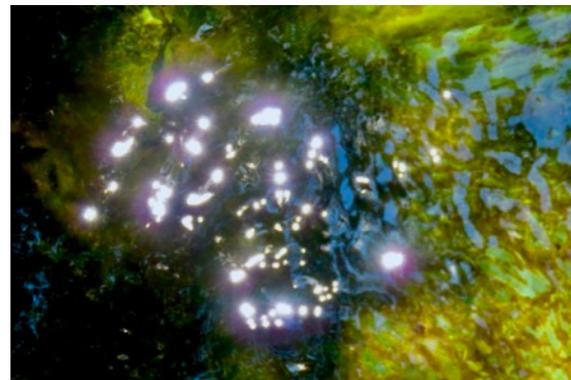
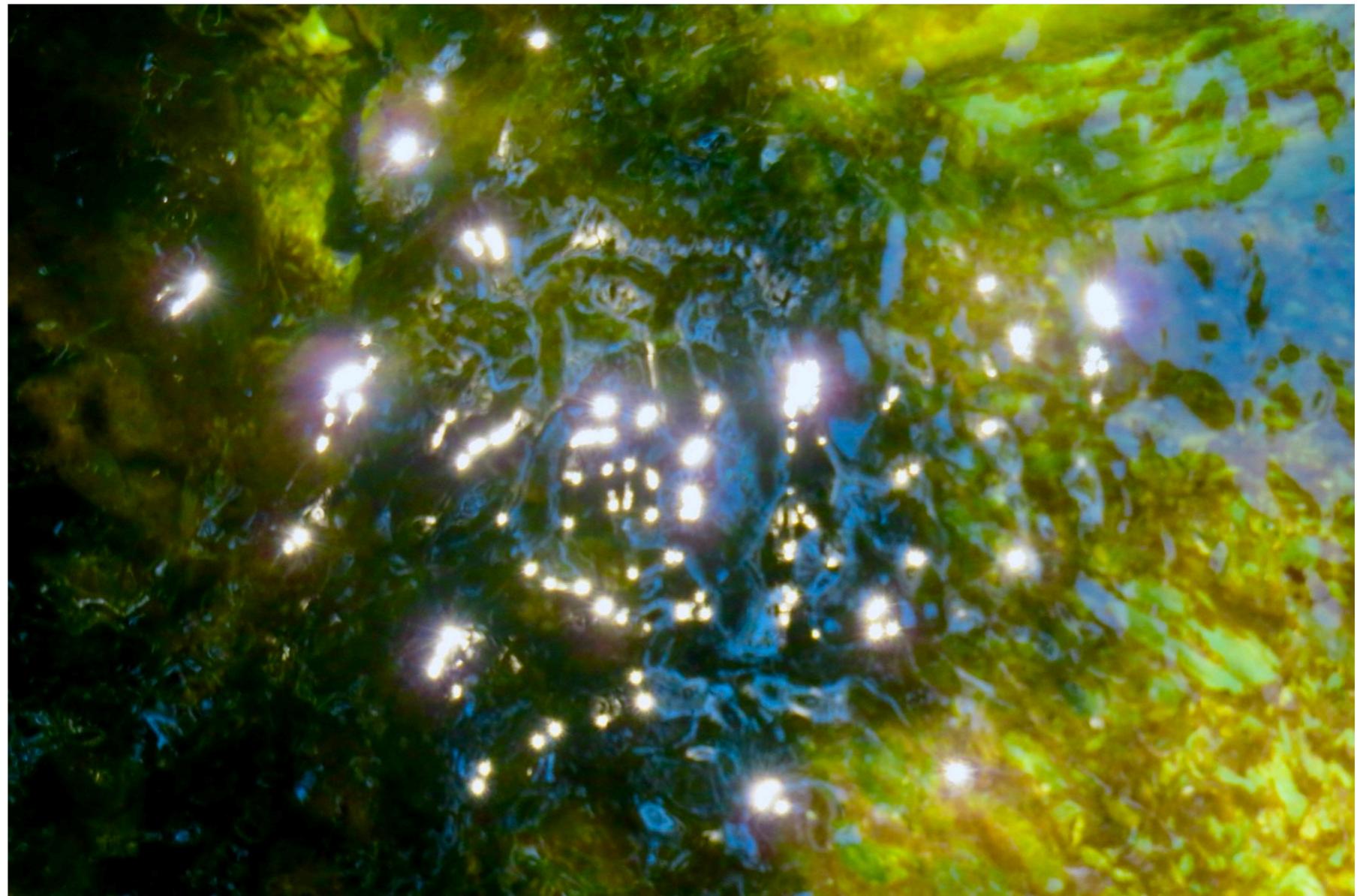
小さな過ちは
不正とされるが
大きな過ちが
正しいとされることがある

小さな違いに
こだわるあまり
大きな違いが
見えなくなることがある

すぐに得られる答えが
正解とされ
あとになって育つ大切な問いが
間違いとされることがある

すぐに役立つことが
善き行為とされ
あとになって役立つことが
愚行とされることがある

世にある困難のなかで
なにを墨守するか
なにを誇るか
わたしたちは試されている



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わたしの思いは
言葉にはならない

思いはどこからか訪れ
言葉にしようとしても
言葉は言葉でしかないから

言葉を覚え
言葉を使うとしても

言葉を使うことで
言葉に使われている

そして言葉は思いを生み
その思いもまた変わり
言葉にならない思いは
行方不明になってゆく

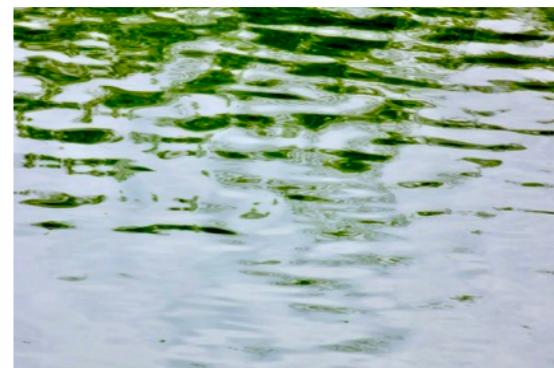
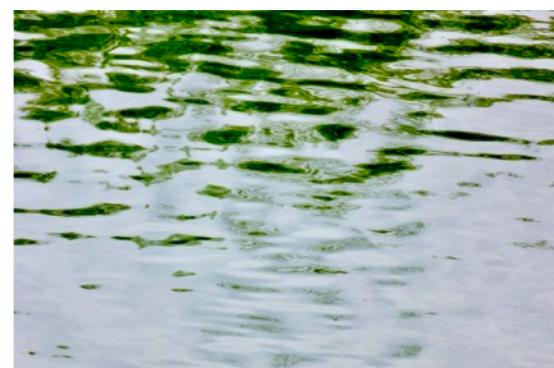
わたしの言葉は
文字にはならない

言葉はどこからか訪れ
文字にしようとしても
文字は文字でしかないから

文字を覚え
文字を読み
わたしは書くとしても

読むことと
書くこと
わかることは
近づきながら離れ

文字にならない言葉は
行方不明になってゆく



*愛媛県総合運動公園にて

もののけは
妖怪変化のような
お話のなかの存在ではない
どこにでもいる

科学というもののけがいる

まさにものに憑いて
科学的であることを
至上の価値と思いこませる

メディアというもののけがいる

霊媒として
神の声だと称しながら
さまざまなお告げをもたらす

お金というもののけがいる

なんでも買えて
意のままにできると思い込み
ほかの価値がみえなくなる

ものに
ここに
ことばに
もののけは憑く

気づかないでいると
知らないうちに憑かれていて
そのいいなりになってしまうのだ



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

呼び声がする

いや声ではない
やむにやまれぬ衝迫が
私を世の外へと向かわせる

それが何なのか
名づけることはできない

私のなかにいる何者かが
私を促してやまないのだが
どこに向かっているのかはわからない

何を求めているのか
それさえわからないのだが

目的地を持たないことこそ
目的なのかもしれない

未知のものへの衝迫が
私を世の外へと向かわせるのだ



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わからなくなる

そこからしか
わかることの外へは
ひらかれない

わかることを
いくら繰り返しても
わかることが
閉じられていくばかりだ

できなくなる

そのことからしか
できることの外へと
向かうことはできない

できることを
いくら繰り返しても
できることが
閉じられていくばかりだ

理論化できなくなる

そこからしか
理論の外にあるものは
見られない

理論を強固にし
それもとに考え続けても
理論の壺が
閉じられていくばかりだ



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わたしの見ている
その色は
わたしにしか
見えない色

それが
同じ名で呼ばれていたとしても
同じ色に見えているかどうか
それはわからない

わたしは
どこかでいつも
同じ色を見ているひとを
さがしている

その眸の光を

わたしの使っている
この言葉は
わたしにしか
わからない言葉

それが
同じ言葉とされているとしても
同じ意味が抱かれているかどうか
それはわからない

わたしは
どこかでいつも
同じ意味を抱いているひとを
さがしている

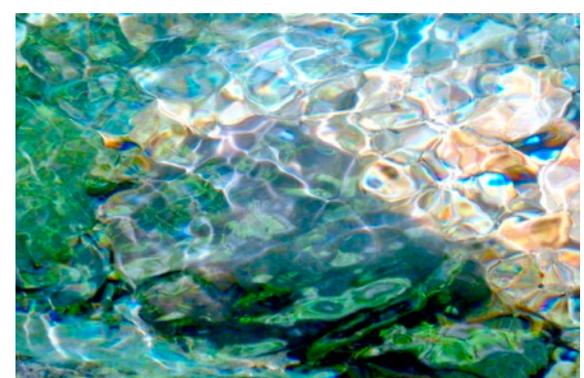
その魂の香りを

わたしの生きている
この世界は
わたしにしか
生きられない世界

それが
同じ世界として現れているとしても
同じ世界として現れているかどうか
それはわからない

わたしは
どこかでいつも
同じ世界を生きているひとを
さがしている

そのいのちの香りを



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

生まれてくるとき
せかいは裏返る

外にあったものが
内になり
内にあったものが
外になる

なにも
失われることなく
ただすべてを
忘れて

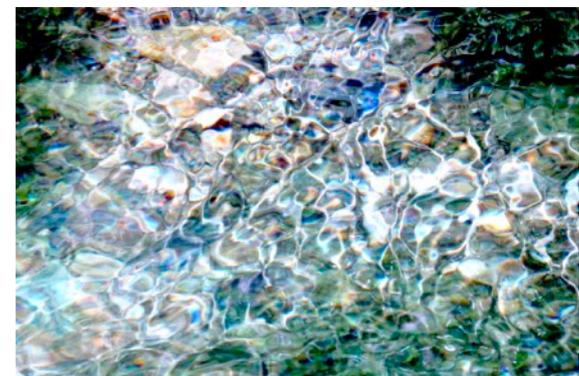
生まれるまえのせかいが
わたしになり
わたしは謎のような
わたしのせかいを生きてゆく

死んでゆくときもまた
せかいは裏返る

外にあったものが
内になり
内にあったものが
外になる

なにも
失われることなく
すべてを
思いだして

わたしの生きたせかいが
わたしになり
わたしは私の謎という
せかいをめぐるってゆく



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

わかるということ
それは
ジグソーのピースを
埋めていくことではない

わかるためには
切りはなされなければならないが

それは
混沌に
穴をあけるようなもの

穴をあけられた
混沌は死を迎えるが

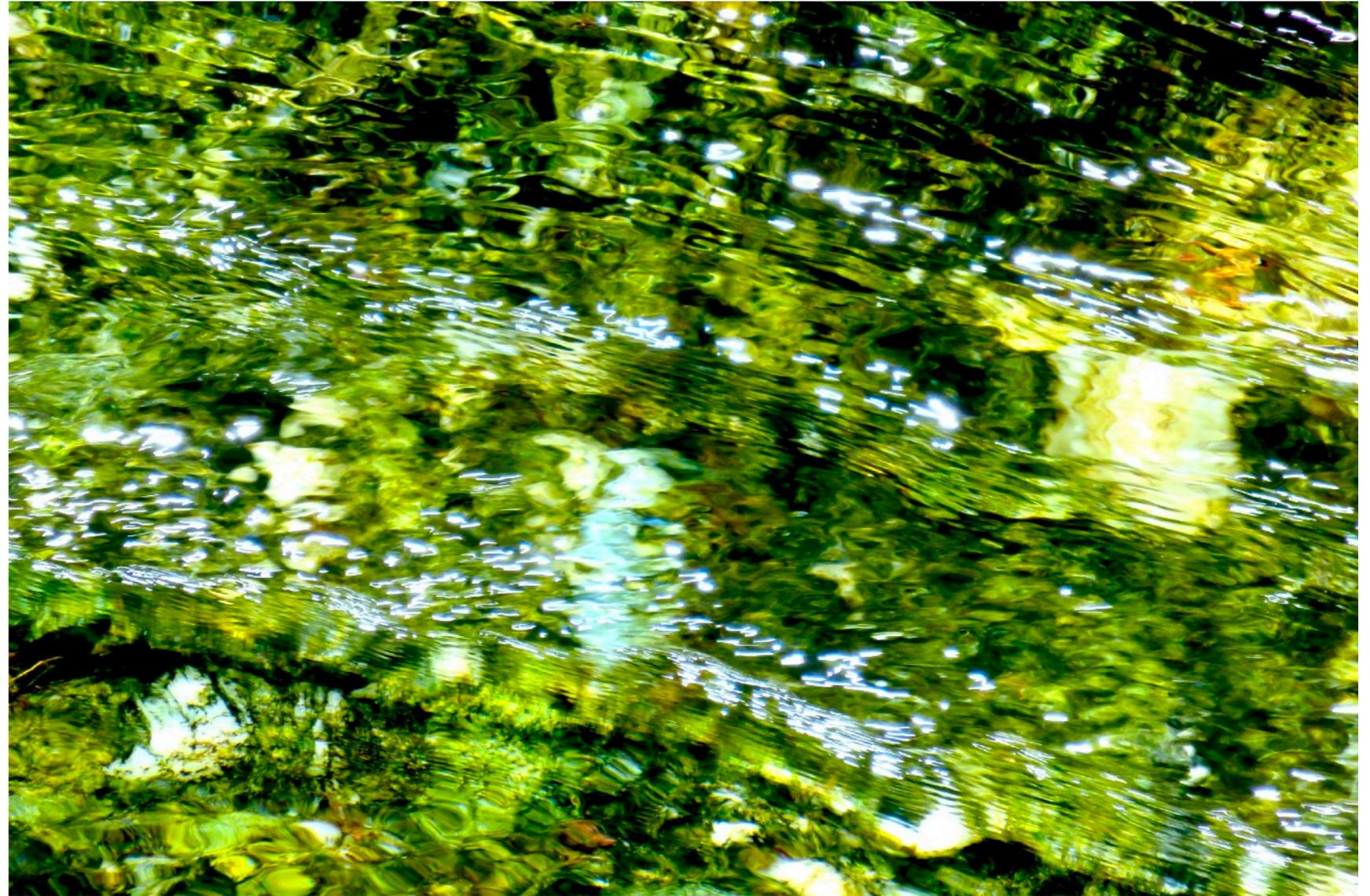
その死が
再生へと向かうには
ばらばらになった断片が
あらたなコスモスへと
生成されなおさなければならない

混沌とは
時間とはなにかと
問われるまえに
時間とともにあるようなもの

問われると
わからなくなり
みずからを失っていく

わからないでいるのは
わかるための種なのだ

その種から
どんな花が咲くのか
だれにも教えることはできない
それはそのひとだけの花なのだから



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

こんなにも
ことばは
あふれているのに
コンポジションはむずかしい

言葉の奔めき流れる河から
どんな物語をつかまえるか
どんな言葉を掬いとるか
どんな響きを奏でさせるか
どんなリズムを刻ませるか

コンポジションするための型はあるか
型を生かす技はあるか
技を演じる心はあるか
心をひらく自由はあるか

型は形を超えねばならない
技は型を超えねばならない
心は技を超えねばならない

こんなにも
コンポジションは
あふれているのに
魂の深みへ届くことばが
流れているのを見つけるのはむずかしい



だれが
奏で
だれが
聴くのか

源へと
耳をひらき
響きを捧げる

だれが
舞い
だれが
観るのか

源へと
からだをひらき
いのちを捧げる

だれが
語り
だれが
聞くのか

源へと
ことばをひらき
ポエジーを捧げる

どこにもない
いまここという
遍在する時空のなかで



*愛媛県松山市・北条にて

ものを
みているか

ものに
貼りつけられた
名ばかりみていないか

ものについて
語られている
ことばかりみていないか

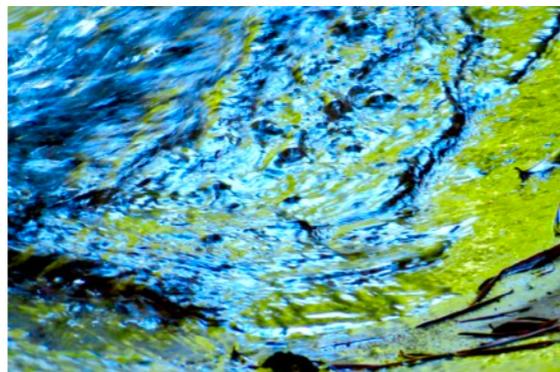
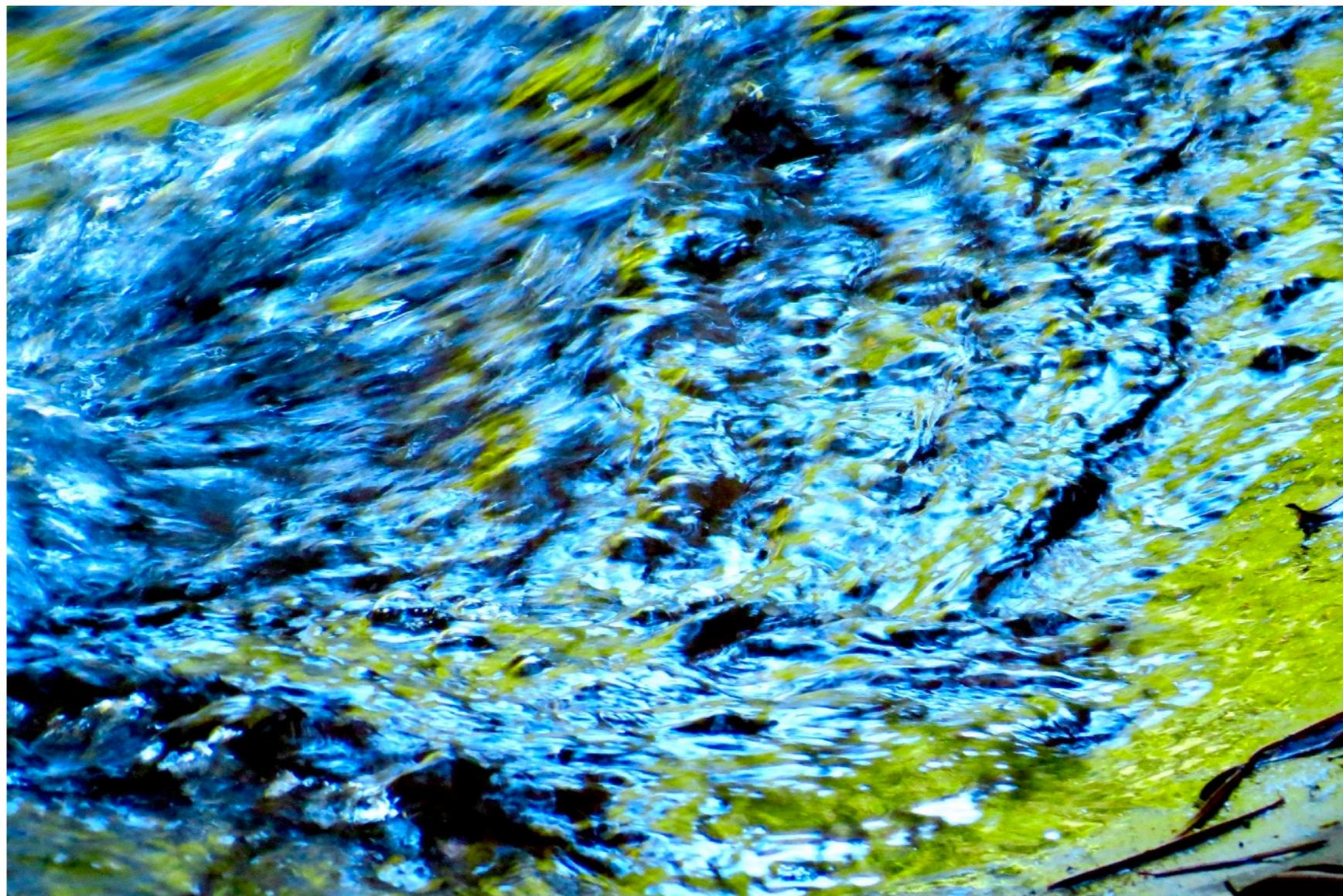
ものを
ヴェールのむこうに
遠ざけたまま

ひとを
みているか

ひとに
貼りつけられた
名ばかり知ろうとしていないか

ひとについて
語られている
ことばかりを聞いていないか

ひとを
ヴェールのむこうに
遠ざけたまま



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

決められた
形によって
生かされるものがあり

その外にでることで
自由になる
あらたな形がある

与えられた
知によって
歩むことのできる道があり

道の外に出ることで
創ることのできる
あらたな道がある

見ることのできる
世界によって
確かめられるものがあり

世界の外にでることで
気づくことのできる
あらたな智慧がある



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

☆photopos-3614 2024.7.31

わたしのもの
とは
なんだろう

山上の崖にぶらさがり
つかまっている岩は
いまにも崩れそうだ

少しでも軽くしようと
ひとつひとつ荷物を手放し
落としていかなければならないとすれば

最後まで手放すことのできない
わたしのものとは……

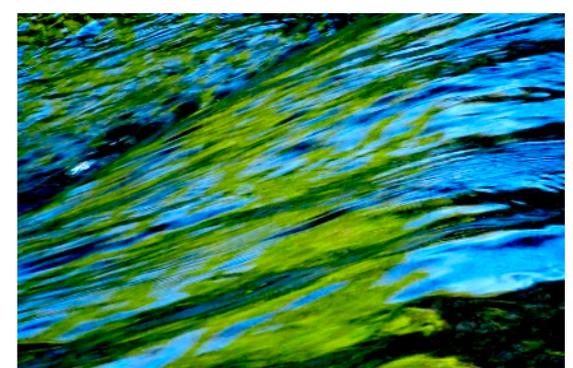
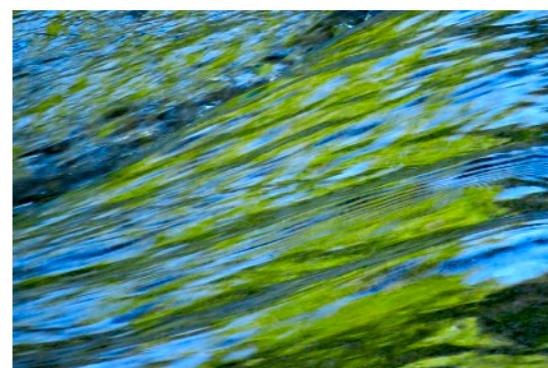
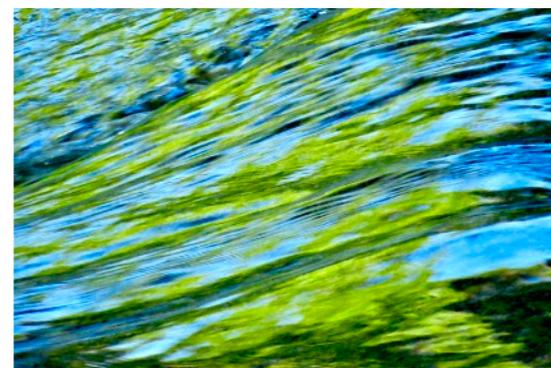
あるいは
無門関第五則の
香巖上樹の公案

口だけで枝にぶら下がっている
樹上の人の下で
祖師の西来意を問う

答えなければ
答えられなかったことになり
答えれば樹から落ちて死ぬ

わたしは
どこからきて
なにをしようとしているのだろう

わたしがわたしであること
わたしが生きていることの
果てない矛盾のなかで



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

生きようとする
死が影になる

死にたくなるのは
生きたいからであるように

生と死という
メビウスの環の外へ

意味を見つけようとする
無意味が影になる

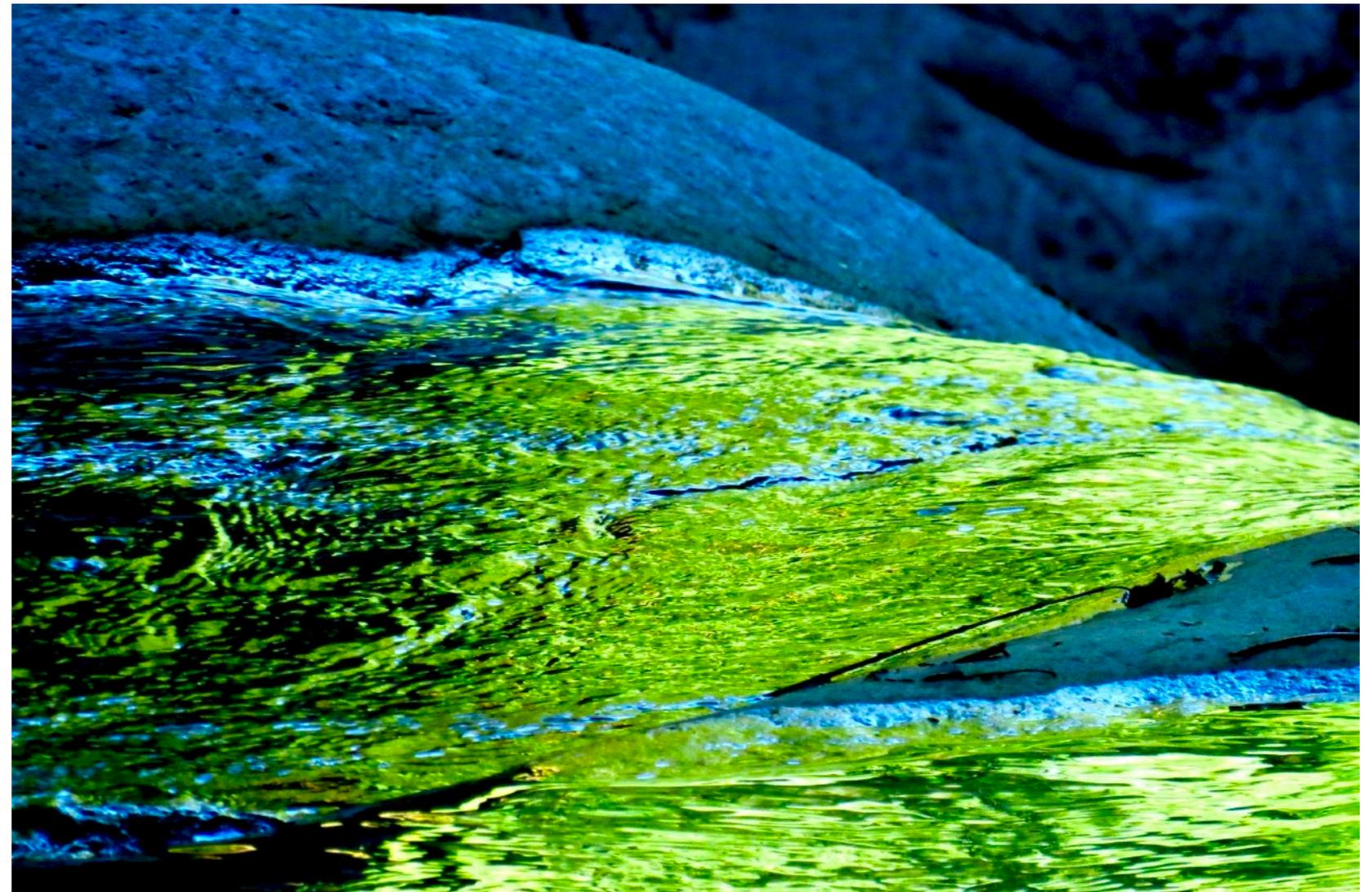
意味を見失うのは
意味に縛られているからであるように

意味と無意味という
メビウスの環の外へ

光を求めようとする
そこに闇が生まれる

闇を恐れるのは
光そのものが見えないからであるように

光と闇という
メビウスの環の外へ



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

与えることで
与えられる

わかることで
みずからを見る

その根源的な力で
宇宙は生成する

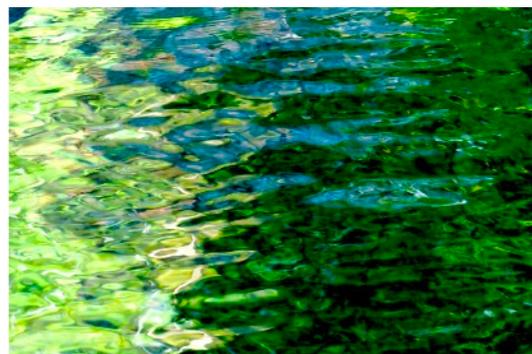
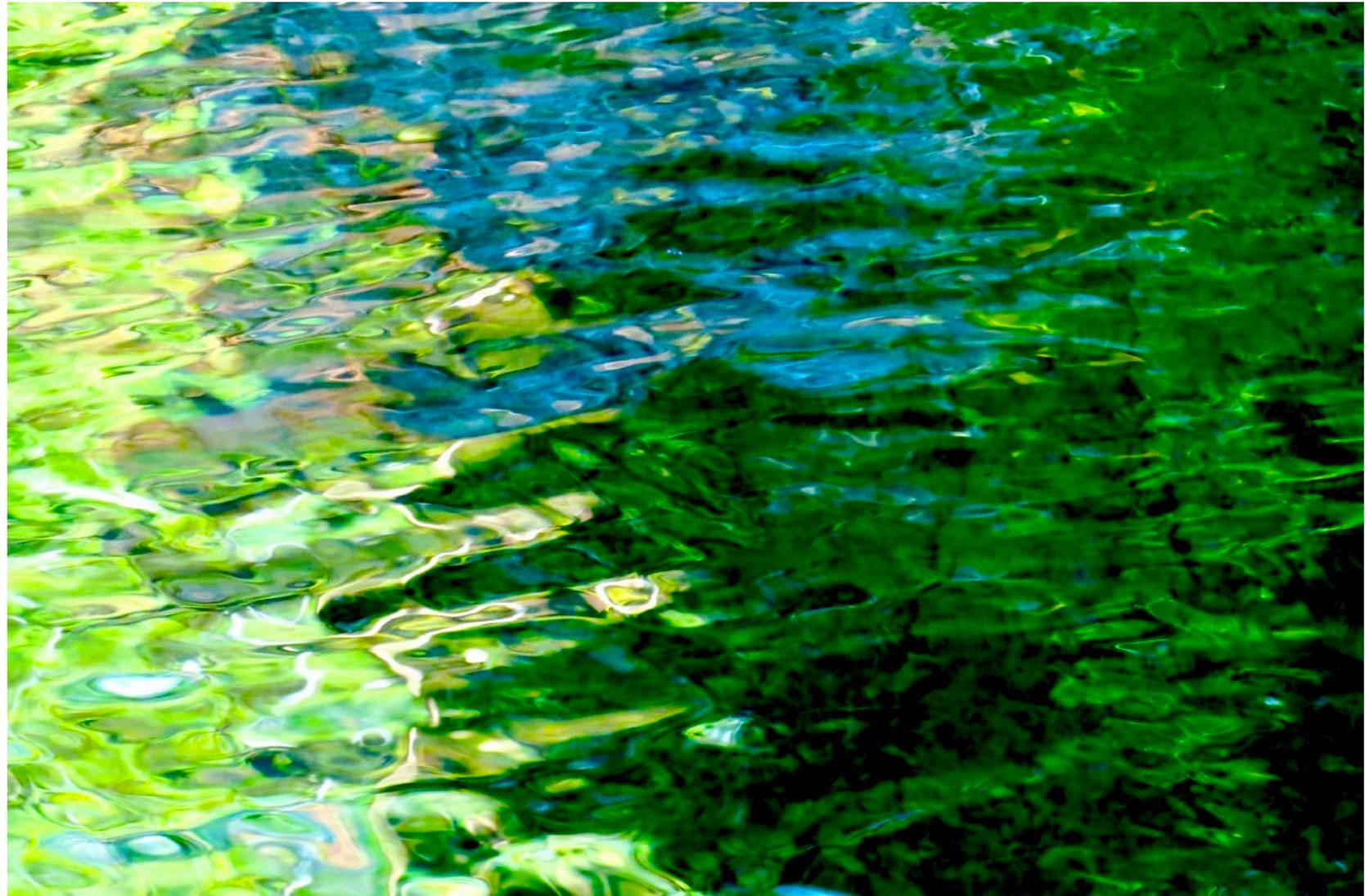
歓びからつくるか
苦しみからつくるか

つくられるものが
似ていたとしても
それは
異なった宇宙でうまれている

慈しみからおこなうか
主義からおこなうか

おこなわれることが
似ていたとしても
それは
異なった宇宙ではたらいっている

わたしという宇宙よ！
祝福のうちに
生成されますように



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

だれが
わたしに
そうさせた

だれのせいでも
ありはしない

じぶんでも
なぜか
わからない

それは
わたしの
知らないわたし

わたしは
ひとりじゃない

からだのなかの
たくさんのわたし
こころのなかの
たくさんのわたし

だれでもない
わたしが
わたしになり

わたしになった
わたしが
そうさせた



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

人間は
道具を使う

道具は
人間の能力を
延長し補完するものだが

道具に
使われてしまうことの
なんと多いこと

道具にできないことは
いったいなんだろうか
そう問い返すこともないまま

じぶんが
道具そのものと化して…

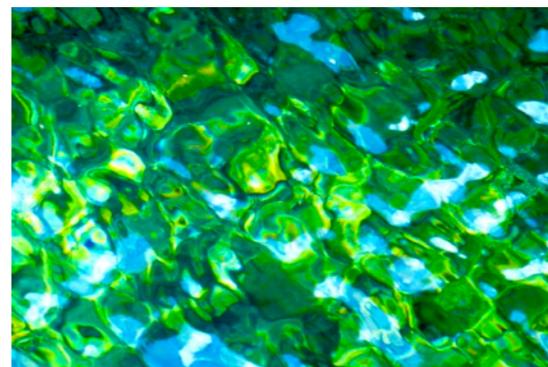
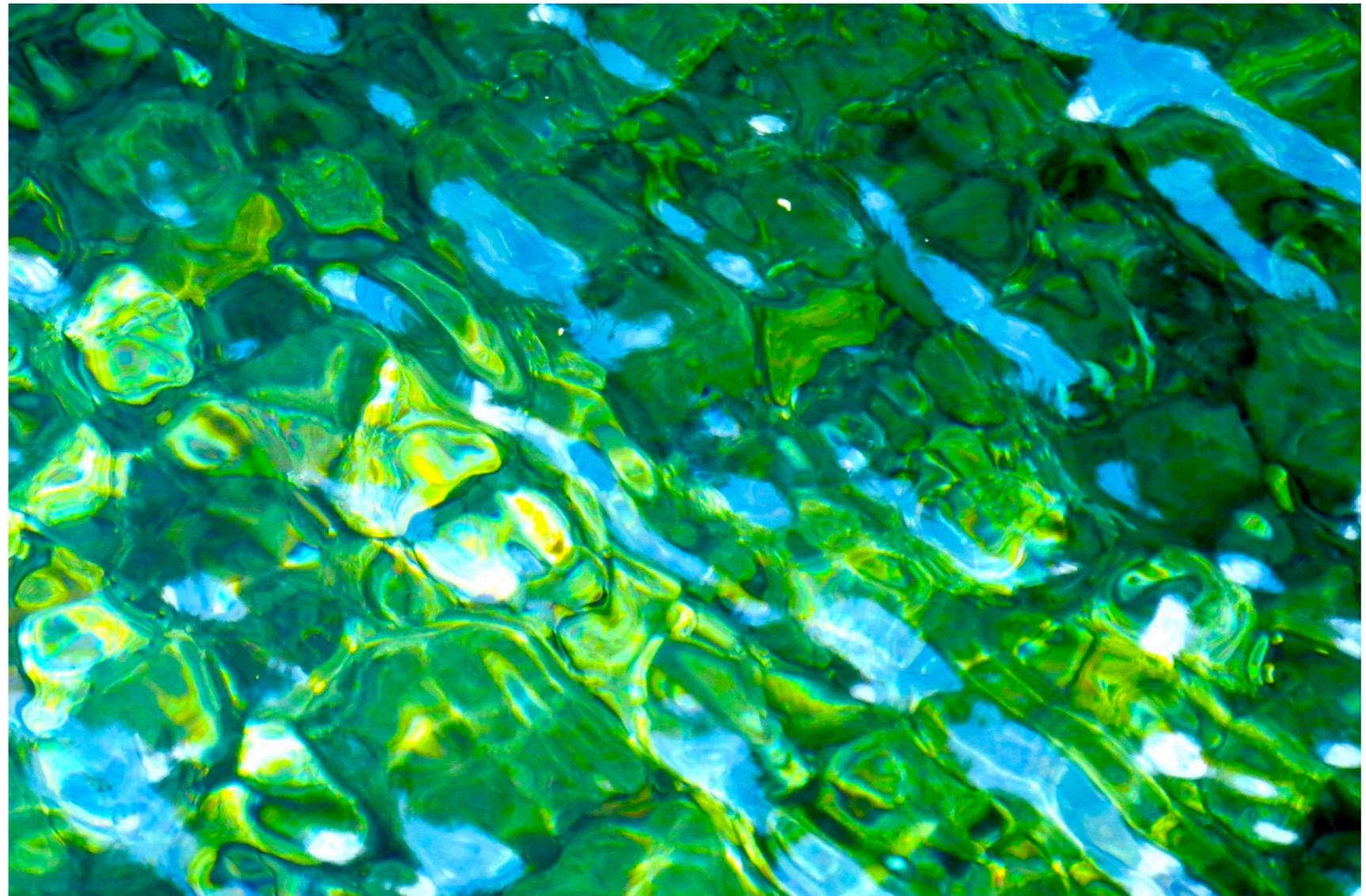
人間は
言葉を使う

言葉は
人間の思考を
延長し補完するものだが

言葉に
使われてしまうことの
なんと多いこと

言葉では
あらわせないもののことを
いつのまにか忘れてしまい

言葉の意味に
閉じ込められて…



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

名なきものは
存在しないのではない
名がないだけだ

名なきものにこそ
ほんとうの名は隠されている

形なきものは
存在しないのではない
形をもたないだけだ

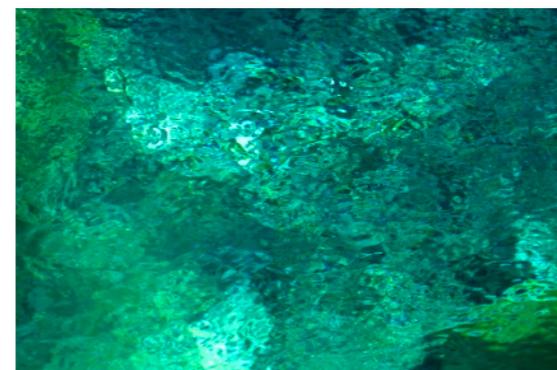
形なきものにこそ
ほんとうの形は隠されている

声なきものは
存在しないのではない
声をあげていないだけだ

声なきものたちこそ
ほんとうの声を響かせている

測れないものは
存在しないのではない
測れないだけだ

測れないものにこそ
ほんとうの尺度は隠されている



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

虎にしても
死んで皮を残す
そんな時代ではなくなったように

人もそろそろ
死んで名を残す
そんな泡沫など去ったほうがいい

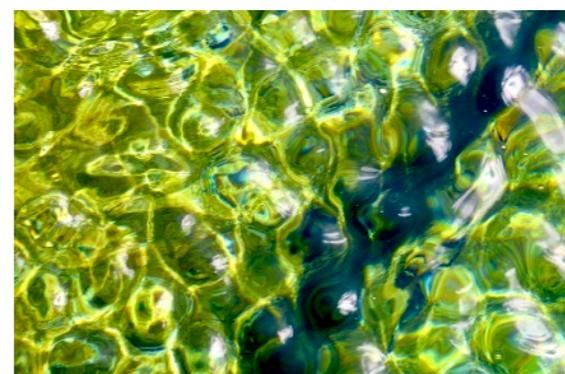
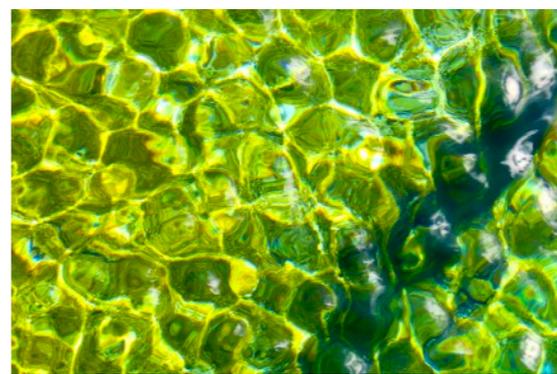
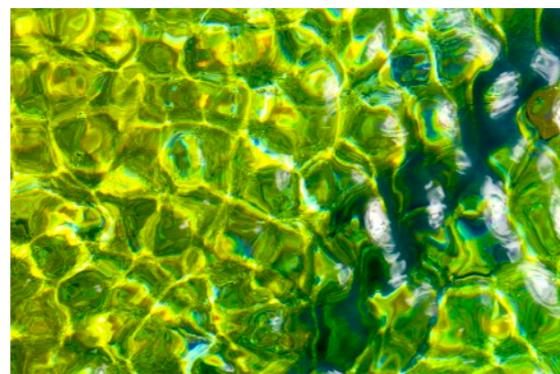
名など残さなくても
人はその人であることを
失うことはない

残すならば
モノやコトそのもので
そのいのちを育てればいい

争い
人を傷つけてまで
みずからの名を掲げて
何になるだろう

私が
私を超えて
私でありつづけるように

名をなくし
また名が変わろうと
魂の河は流れ続ける



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

生き物には
食物連鎖の
ピラミッドがあって
調和が保たれるように

人間社会にも
それに似た
ピラミッドがあるようだが

連鎖の意味は
食物連鎖と
支配構造とは同じだろうか

霊的世界にも
ヒエラルキア構造があり
第一ヒエラルキアから第三ヒエラルキアまで
九つの階級の霊存在がいるという
人間はその下の十番目の新参者

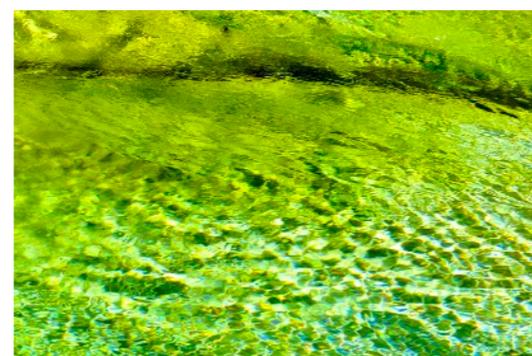
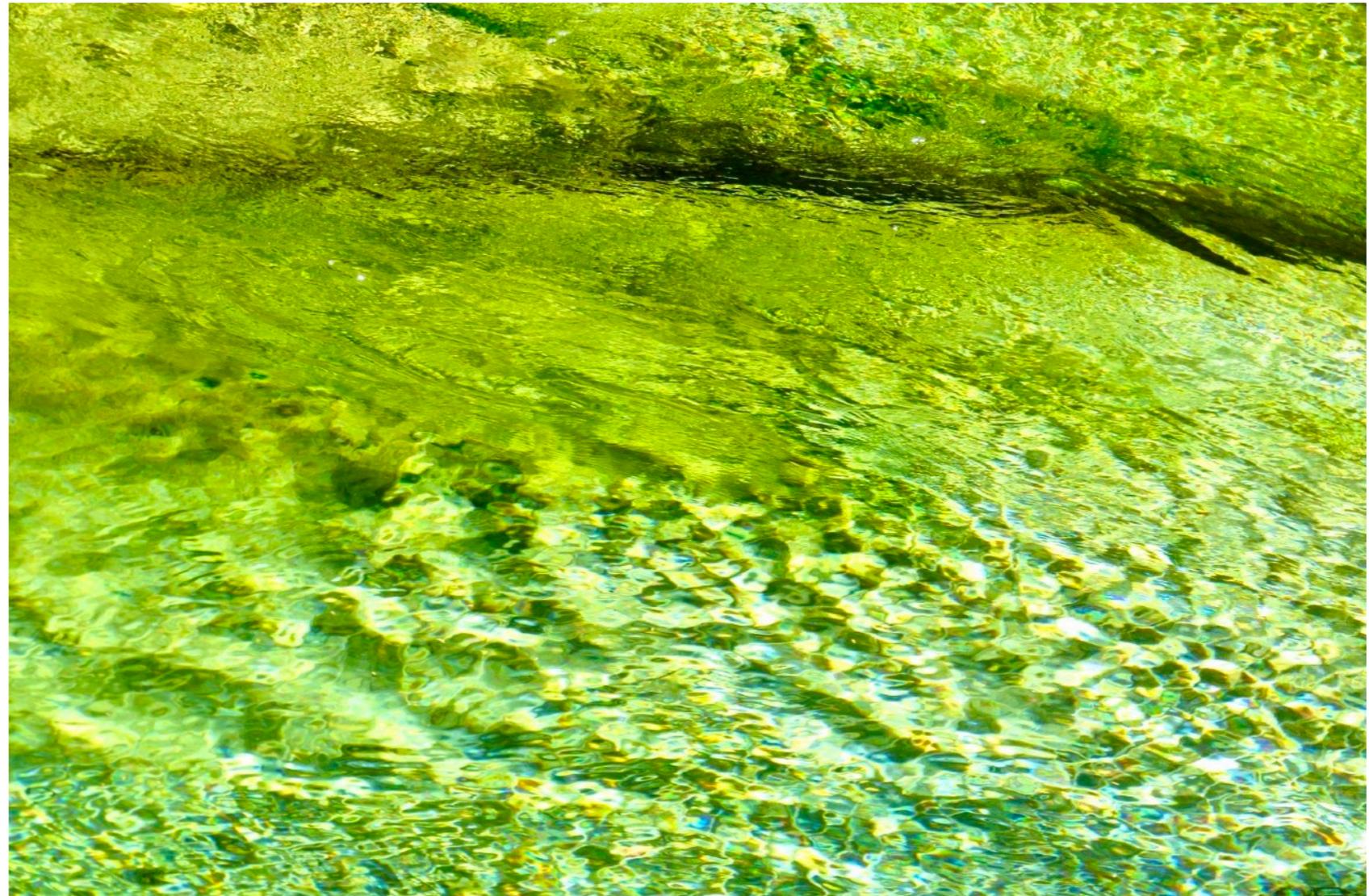
上と下を絶対化し錯誤する者は
最も高き第一ヒエラルキアは
地上から最も離れていると考えがちだが
むしろ自然界と人間界のなかで活動し
みずからを開示している

もっとも高き者であるがゆに
もっとも低き者のなかで
働きかけることができるのだ

かつてクリシュナは
人間になることはできなかったが
キリスト・イエスは
人間になることでこそ
そこにあらたな道をひらくことができた

高きを目指すなら
低きへ赴かねばならない
往相は還相へとつながっているからである

人間は最下位の霊存在だが
それゆえに得られる自由がある
その自由のもとで
あえて低きへと歩むのだ



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

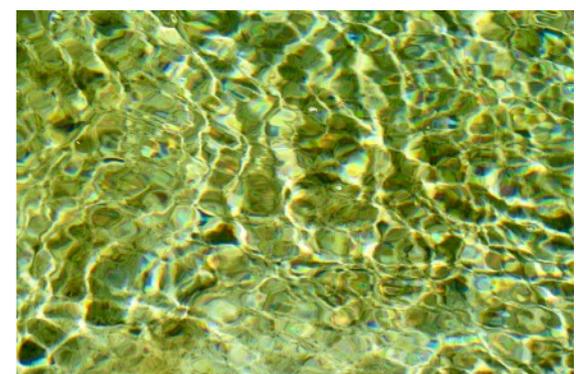
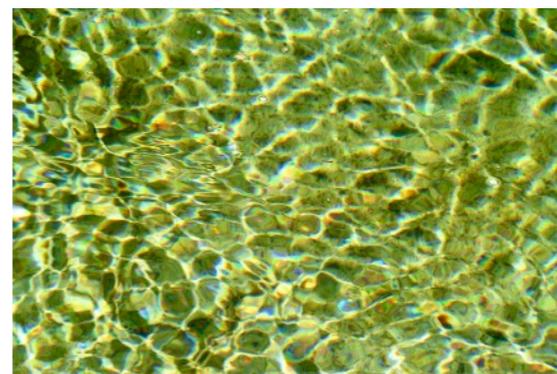
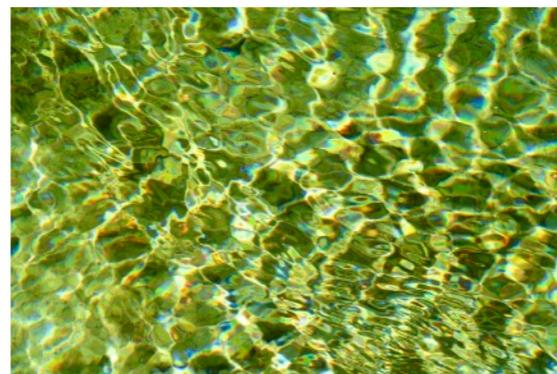
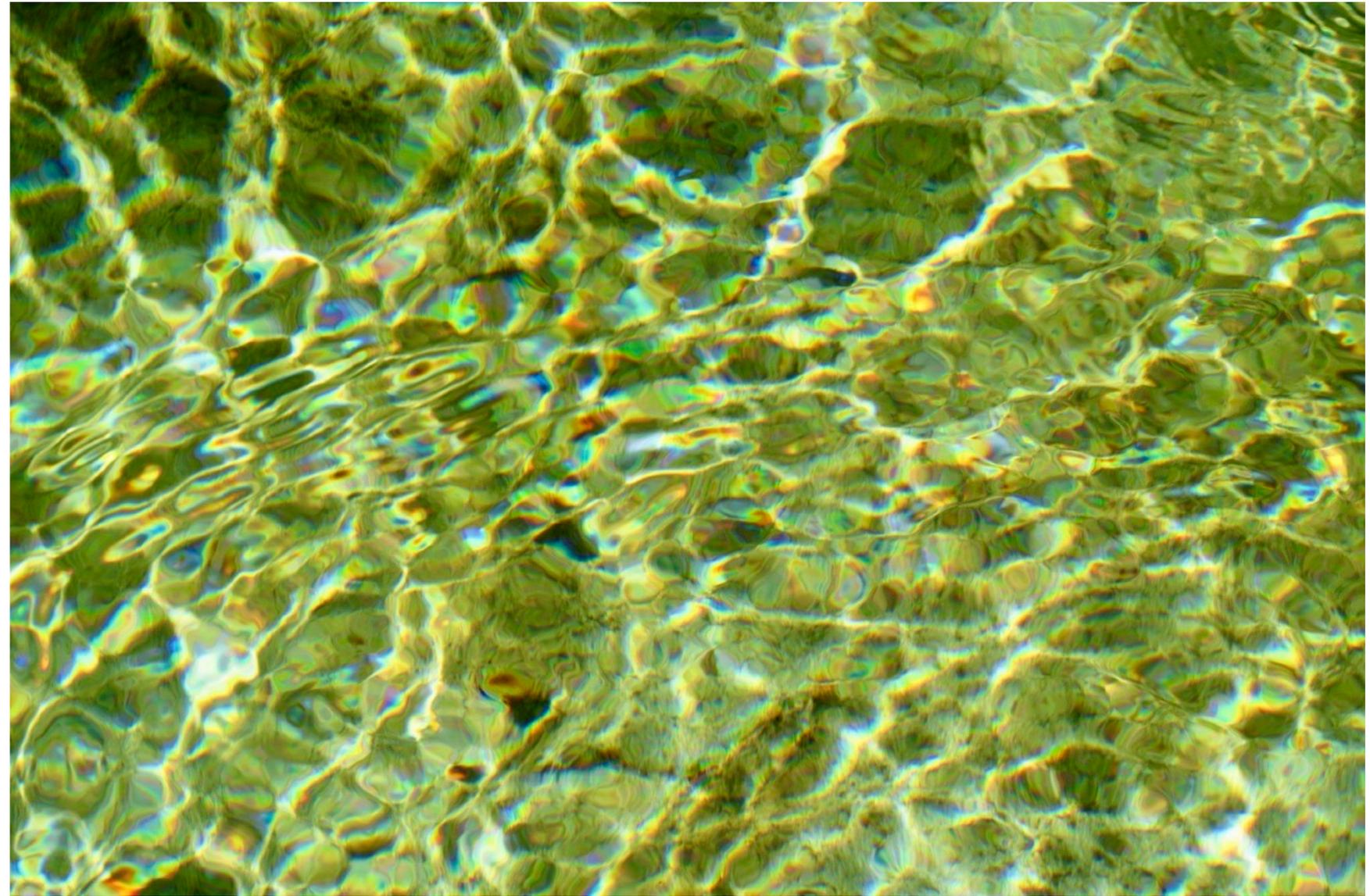
だれが
だれに
さえずっているのか

機械は
アルゴリズムで作動し
やがてひとも
アルゴリズムのなかで
生きようとしはじめるとき

さえずりは
さえずりのなかに
消え去っていき

やがて
さえずる者の姿さえ
見えなくなっていく

それでも
さえずり機械は
だれもいなくなった世界で
いつまでも
さえずり続けるだろうが…



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

現実
ひとつだ
とばかり
思いこんでいると

じぶんが
多次元世界の
どこにいるのか
わからなくなる

もともと現実とは
パラレルワールドを
サーフィンしているようなものだが

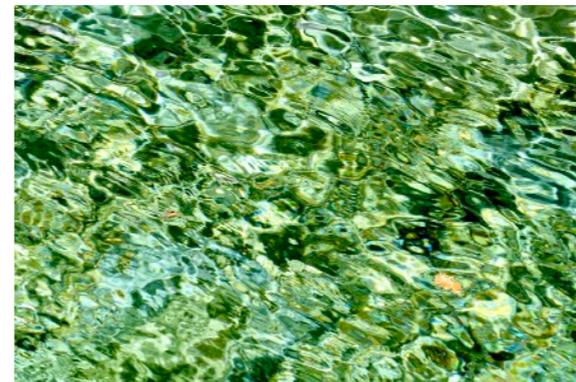
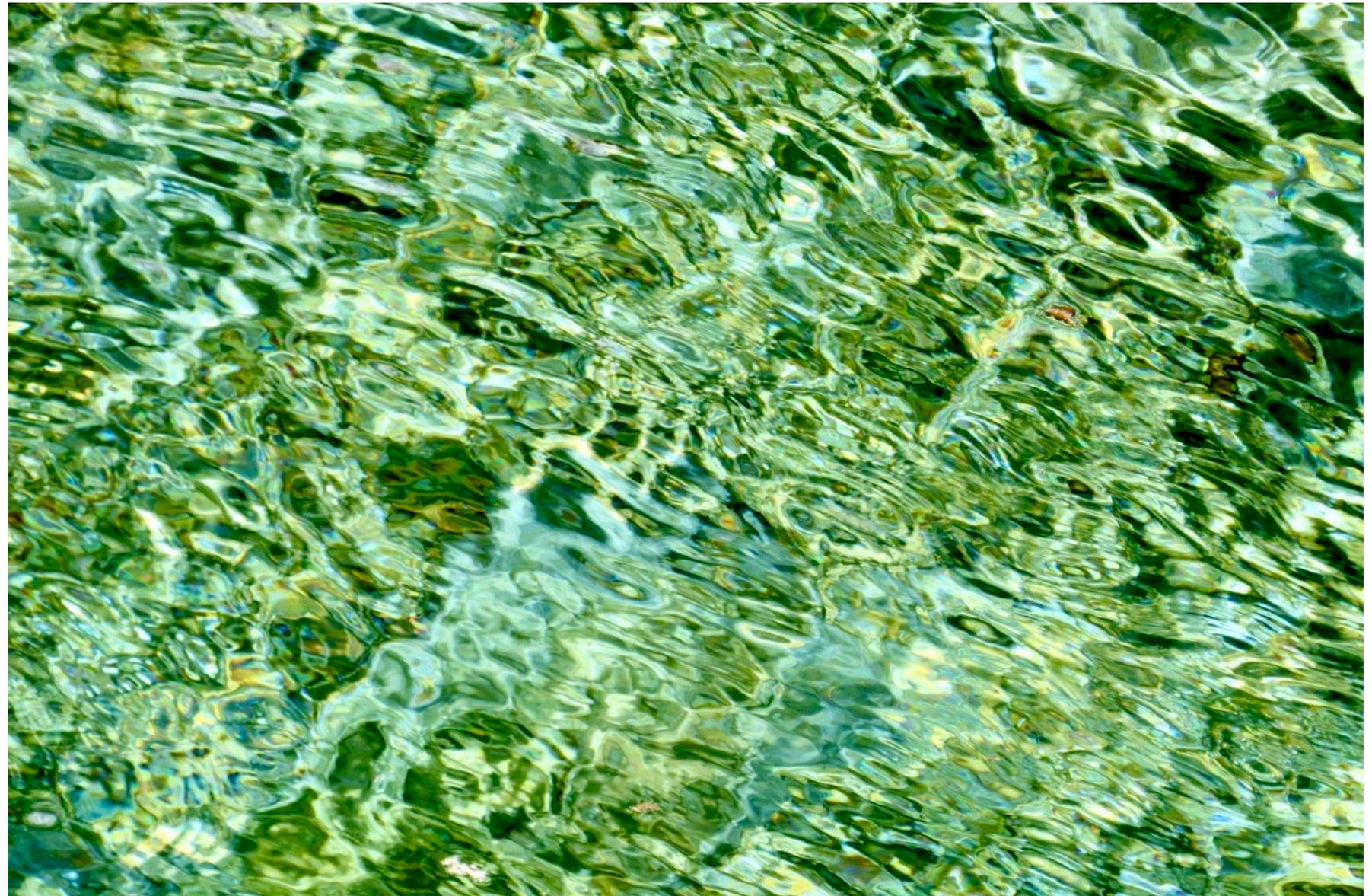
いくつかの
まとまった幻想を形成していた世界も
ひとの意識のなかに
ヴァーチャルな現実が強く入りこみ
少しずつそれらの世界での
棲み分けも変わってきている

いま多元的世界の現実
過去へシフトする方向と
あらたな意識を得ようとする方向に
大きく分岐してきているようだ

同じものをみても
すでにまったく
異なったものをみていることが
多くなってはいないだろうか

現実
は多次元的であり
それらの次元はいくつかの
分岐を形成しながら流れている

どの現実を見ているのか
見定めながら生きられますように



*愛媛県久万高原町・面河溪にて

ひとはそれぞれ
十界に棲むという

人間は水を水と見
天人は瑠璃と見
餓鬼は膿の血と見
魚は自分の宮殿と見るように*

同じ世界が
異なった世界として
あらわれている

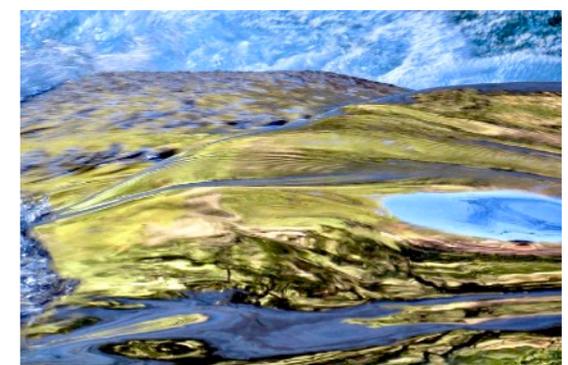
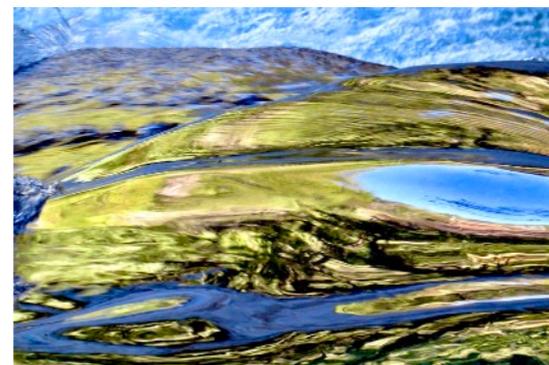
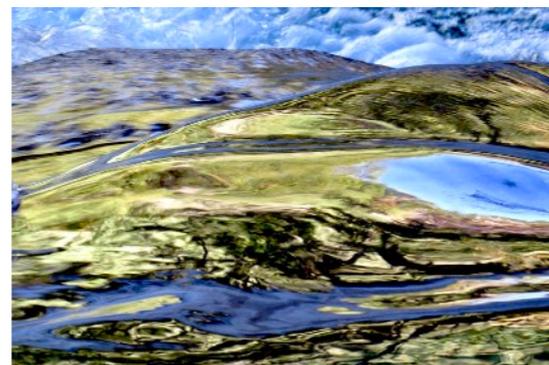
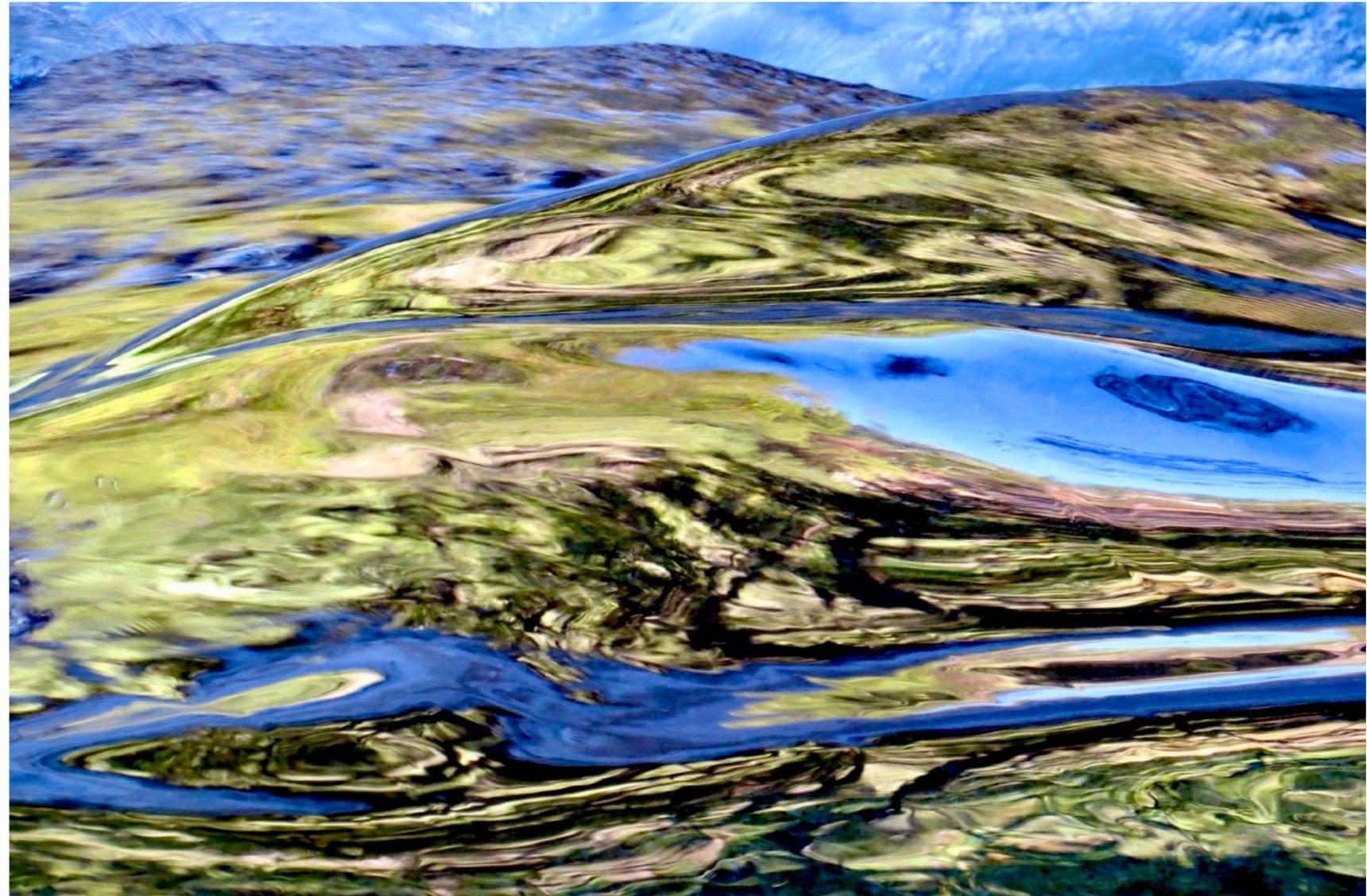
それぞれは
それぞれの世界を
疑うことはなく
世界は世界だと見ている

同じものを見ても
同じように見ないのは
同じ話をしても
同じ話にならないのは
世界が異なっているからだ

世界を瑠璃に
見せようとする者は
聖者ではないだろう

異なった世界を
つなごうとするためには
すべての世界にひらかれた
聖なる耳が必要だ

世界を膿の血と見る者に
聖者は手を伸べようして
ともに地をよろよると
歩きもするだろう



*愛媛県久万高原町・面河溪にて
(*「一水四見」(『瑜伽師地論』道元「現状公案」)

ひとはなにを
追い求めて
生きているのか

振り返ることで
見えてくることもあるだろうが

魂の謎はどこまでも深く
私たちの底で流れつづけている
見えない水脈とともにある

時に衝動的に
なにかを追い求め
時に否応なく
なにかに追われながら

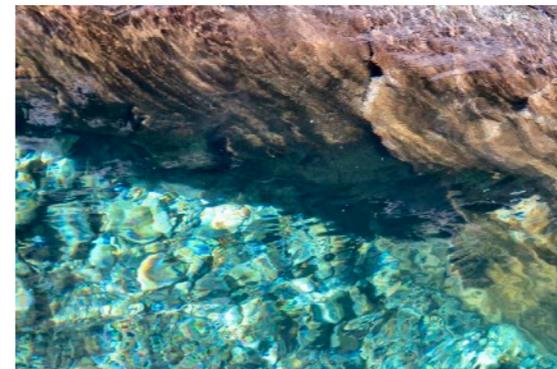
そして追い求めるものが
明らかになることで
そこに物語が生まれ
それを辿ることでは
見つけられないものもあるだろうが

それが得られた後
ひとはさらになにを追い求め
生きていこうとするのか

思考が自由であり得るとしても
それは見えないところから現れる
未知の水脈から訪れる謎であり続ける

はたして私たちは自由なのだろうか
自由を得ることができるのだろうか
自由を得るといふことはどういうこと
なのだろうか

魂の旅はどこまでも
謎の迷路をゆくようだ



*愛媛県久万高原町・面河溪にて